

# 平成 28 年度 第 8 回 觀察会 記録

日 時	平成 29 年 3 月 6 日～9 日	
観察地	長崎県平戸島	
講 師	コーディネーター：田中 克先生、現地コーディネーター：小関 哲先生	
テー マ	『21 世紀の人間と自然を考える』－悠久の営みと若き継承者たちの営み	
備 考	参加者 22 名、スタッフ 2 名（渡邊、飯田）	一行 24 名 記録 飯田

## 第 2 回平戸島自然観察会に参加される皆様へ（出発に先立ち田中先生からいただいたメッセージ）

全国各地での自然観察会は、それぞれの地域で多くの皆さんのが熱い思いを込めて、地域の自然や文化を大切に、続く世代のために汗を流されていますので、単純に比較をすることはできません。しかし、個人的には今回行かれる長崎県平戸島は 30 歳代の大半をマダイやヒラメ稚魚の研究に展開した研究フィールドになりましたので、殊のほか思いの深い場所です。森里海連環学の発想にもつながった場所でもあり、そのような場所で 2 回にわたり観察会が実施されますことはうれしい限りです。



平戸島のあまり知られていないものの非常に奥深い歴史に根ざした自然と文化の深い結びつきを、広く世界に目を向けて、この困難な時代を切り開く情熱に溢れた取り組みが行われている特別な場所といえます。私が 1975 年から 1985 年前後まで調査に通い続けた平戸島が、今では日本の世界に開かれた大きな窓口になることなど、当時は全く想像もできませんでした。そして、そのような挑戦をされている主体が若者達であり、漁家や農家の皆さんであることも目を見張るばかりで、大いに元気付けられます。

森里海連環は、二つの重要な軸を持つことを折に触れ述べていますが、平戸に根付く歴史という時間軸、さらにその歴史にも深く関わる世界につながる空間軸を、熱い思いの皆さんのが見事に紡ぎ、明るい未来を予感させる世界が広がっています。

ともあれ、理屈は抜きにして、第 1 回目の平戸島観察会ではいただくことのできなかった旬のヒラメやウチワエビなどの海の幸を堪能してください。悪天候はすでに前回の観察会で使い果たしましたので、きっと早春の穏やかな天気に恵まれることを願っています。

明日から 3 泊 4 日で実施される 2 回目の平戸島自然観察会にご参加の皆様、楽しく有意義な観察会なりますよう、遠く長野県黒姫山麓の雪の世界から祈っています。 2017 年 3 月 5 日 田中 克

## 行 程

### 1 日目（3 月 6 日）

新大阪のぞみ 99 号（8：18 発）→ 博多着（10：48）→ 平戸瀬戸市場（昼食）→ 根獅子の浜・今井弥彦氏の塩炊き工房見学 → 平戸海上ホテル（泊）

### 2 日目（3 月 7 日）

崎方公園（キリストン墓地、アダムス碑、ザビエル記念碑等）→ 城下町自由散策（昼食）→ 平戸オランダ商館・→ 川内峠 → 古民家レストラン（夕食・懇親会）→ 平戸海上ホテル（泊）

### 3 日目（3 月 8 日）

ホテル → 平戸城 → 志々伎公民館・対面式 & 昼食 → 福田酒造見学 → 宮之浦漁港・2 班に分乗船（定置網引き上げ／ツーリング）→ 5 班に分かれて民泊

### 4 日目（3 月 9 日）

志々伎公民館でお別れ式 → 千里ヶ浜 → 田平天主堂 → 田平公園（昼食）→ 平戸瀬戸市場 → 博多駅（のぞみ 48 号 16：10 発）→ 新大阪駅（18：38 着）・解散

## 1日目：3月6日 晴

新大阪駅8時18分発のぞみ99号で博多へ向かう。Kライン観光チャーターバスで一路平戸へ。道の駅松浦(海のふるさと館)で小関、堀両氏と半年ぶりに合流し、午後1時半ごろ平戸瀬戸市場に到着。昼食は海鮮どんぶりとタイあら汁。海鮮は鮮度よくぶりぶりと、あら汁もまことに美味でした。



Kライン観光バス



半年ぶりの小関先生と堀さん



昼食の海鮮どんぶり

タイのあら汁が  
まことに美味！

## 1. 今井弥彦さんの塩炊き屋を訪問

## (1) 塩づくりにかける想い

バスで根獅子の浜に移動。小関さんが尊敬してやまない今井弥彦氏の塩炊き工房を訪問、今井さんの塩づくりにかける想いをお聞きしながら、工房を見学した。

出身は長野県松本市。林業を志す一方、学校では教えない地方の言葉や食べ物など、特に田舎に色濃く残っているものに关心があり、三重、高知、天草などを経てここに来た。塩づくりの技術を天草で得て、根獅子で塩づくりを始めた。「私が始めて作った塩を食べてくれた人が“懐かしか！”と言った。この人は塩の本当の味を知っている人で、長い専売の時代、精製塩しかなかった時代を経て、ほんとの塩の味に出会った人の喜びの声が忘れられない。この海を守り本物の塩をつくるていく」と。

## (2) 塩づくりで大切なこと

製法もあるが最も大事なことは、塩が作れる海域を保存することで、その一つに山からミネラルを多く含む水が海に注がれる環境が維持されていることが大切。今、一番不安なことは、この東北約40kmに玄海原発があり、福島原発のような事故がおきると、ここでの塩づくりが出来なくなることだと。塩づくりはまさに森里海連環の世界であった。

お土産に今井さんがつくれた塩(右写真)をいただき、工房をあとにした。



今井弥彦さん



## 2. 平戸海上ホテルに宿泊

このホテルの利用は二回目であるが、今回は壺本支配人、米倉料理長が宴席に挨拶に見え、また腕によりをかけてのお料理はメニュー盛りだくさんでどれもが美味しく、お酒も美味しく、平戸に来た幸せを満喫した夜でした。

写真左から  
料理長と支配人  
とれとれのおつくり  
お酒も堪能しました



2日目：3月7日（火）晴

## 1. 朝散歩・雄香寺（ゆうこうじ）

雄香寺は平戸海上ホテルから数分の、臨済宗妙心寺派の寺院。有志 10 数人が早朝散歩し境内を散策しました。1695 年（元禄 8 年）、当時の平戸藩主松浦棟により建立された歴代平戸藩主の菩提寺で、歴代藩主の墓所。境内はシンと静まりかえり、静寂で厳かな雰囲気でした。境内を辞するころ日の出となり、釣り舟も加わった美しい景色を見ながら帰館しました。



## 2. 崎方公園

崎方公園は平戸港と市街地を一望する高台にあり、春はサクラやヒラドツツジが咲き乱れる名所とのこと。公園の一角にキリスト教信者のお墓、徳川家康の外交顧問で日本名を三浦按針と名乗り、平戸の海外通商に貢献したウイリアム・アダムスの墓、その右に、400 年前祖国の土を踏むことなく平戸に眠る人々の靈を慰める追悼碑（小関 哲氏父君彰博氏等の尽力で建設されたものという）やフランシスコ・ザビエル記念碑などがあり、静寂で気品に満ちた美しい公園でした。

### （1）カクレキリシタンのこと

現在日本のキリスト教信者数は人口の約 1 % であるが、長崎県は県人口の約 12 % という。この背景には戦国時代、キリスト教の布教活動が平戸島など長崎で盛んに行なわれ、多くの信者を獲得した歴史上の経緯があることによる。秀吉による宣教師追放令や徳川幕府による禁教令などキリスト教信者へ迫害や弾圧を受けても棄教せず、秘かに信仰を続けた人びとがこの地方に多くいた。他の地域ではあっさり棄教した信者が多いなかで、長崎の人々は棄教することなく信仰を貫く人は多かったのだろうか。最近上映された遠藤周作の「沈黙」を映画化した「沈黙ーサイレンサー」のシーンを思い出しながら、小関氏のカクレキリシタンのお話しを感慨深く聞いた。



### （2）三浦按針（ウイリアム・アダムス）のこと



1600 年に平戸に漂着したオランダ船リーデフ号のイギリス人航海士ウイリアム・アダムスを徳川家康は気に入り、外交顧問に採用して三浦に領地を与え、名を三浦按針とした。彼は江戸、三浦、そして貿易の重要な拠点だった平戸を行き来し、晩年は平戸に住みここで亡くなった、平戸の恩人。

小関氏が子供だったころ、父親とその仲間が休日になるとお墓を掃除するから手伝えと、よく引っ張りだされた。昔、平戸を築いてくれた外国人のお墓を大切にしようと、按針の命日を按針忌としてお祀りすることを始めたところ、イギリス大使やオランダ大使が参列するようになり、今では数百人が集まる大イベントになった。一方、無名ながら平戸で亡くなった船乗り、大工さん達の名前を刻んだ碑が、氏の父君達の尽力で三浦按針の墓（左上写真）の横に造られている。碑の銘文をアメリカから来た子供達に読んでもらっているが、どの子も神妙な様子である。400 年前に平戸に来て

亡くなった人たちへの敬慕の念をもつことは国籍は違っても共感を得られるし、そのことを実践している平戸の市民であることに誇りを感じていると、小関氏はいう。

### 3. 松浦歴史資料館

領主松浦氏の居館（地元ではお館=おたちとよぶという）がそのまま博物館になっていて、松浦家の宝物、什器その他を収蔵・展示している。

平戸松浦家は松浦党を代表して鎌倉・室町期を生きのび、豊臣期でも大名として公認され、徳川期には6万3千石の平戸藩として、改易されることなく明治まで続いた家系である。その理由を司馬遼太郎は、ポルトガルやスペイン、オランダとの貿易で得た富が源泉であったと、「街道をいく」に述べている。南蛮貿易で得た品は、キリスト教の疑いをかけられることをおそれて処分したいわれ、資料館展示物には見なかつた。



茶室が屋敷内にあり、そこで昔、松浦の殿様が賞味した「うば玉」（上写真）が近年復元されて茶菓子としてだされ、美味しいいただいた。

### 4. 市内散策

松浦歴史資料館をあとにして午後二時まで平戸市街地の散策と昼食を楽しんだ。六角井戸、大ソテツ、平戸ザビエル記念聖堂、寺院と教会の見える光景、光明寺、藤浦洸の歌碑、通りに並ぶブロンズ像や商店のディスプレイを楽しんだあと、昼食は長崎チャンポンや皿うどんを。（右写真寺院と教会に見える風景）



### 5. 平戸オランダ商館

その歴史と復元、展示物の説明を学芸員日高悌三氏に説明していただいた。

- ① 平戸オランダ商館は、1609年に江戸幕府から貿易を許可された東インド会社が、平戸城主松浦隆信公の導きによって平戸に設置した、東アジアにおける貿易拠点。
- ② 土蔵の付属した住宅1軒を借りて始まり、その後、貿易が拡大するに従い順次施設の拡大整備が行なわれた。特に1637年と1639年に建設された倉庫は規模が大きく、充実した貿易の象徴であったという。
- ③ 1640年将軍徳川家光の命を受けた大目付井上政重により、1639年建造の倉庫にキリスト生誕にちなんだ西暦の年号が示されているとして、当時の禁教令の下、全ての建物の破壊が命じられた。
- ④ 1641年5月、商館は長崎出島へ移転し、33年間の平戸オランダ商館の歴史に幕が下ろされた。
- ⑤ この時代、江戸時代初期の国際貿易、キリスト教の布教・禁教など、わが国の対外政策の歴史を考える上でも重要な時期であり、平戸の歴史と文化を考える上で重要な史跡として1640年頃のオランダ商館の建物を復元した。



### 6. 講演：「オランダからみた平戸」講師レムコ・フロライクさん

氏はオランダに生まれ、沖縄に1年留学後ドイツでボランティア活動。

その後イギリスで日本語と観光学を学ぶ。関西外語大学に留学。オランダで就職し南アフリカに派遣されるなどさまざまな経緯をへて、現在平戸市役所に勤務。



はじめに平戸の印象として、食べ物が美味しいこと、気候がよいこと、景色が美しいこと、歴史と伝統を感じること、人がよいことなどを話した。平戸の将来像について、自然景観を大切にし、きちんとした都市計画ののもと企業誘致、文化への投資、平戸の伝統と文化を生かした国際化、サッカー交流、姉妹都市交流、フィランド俱楽部のこと等多岐にわたり見解を披露。最後に昔芸者の置屋で近年電器店として使用していた家屋を購入し、改築して旅館にする事業を始めたとのこと。後刻見学に行くことになった。

## 7. 川内峠

オランダ商館を出発して平戸島北部にある川内峠に向かう。丘の上に登ると360度の展望が開け、生月島、西彼杵半島、五島列島まで眺望できる大パノラマが広がる絶景の地であるが、この日は風が強くてかつ冷たく、景観を楽しむどころでなかった。早々にレムコ一氏宅へ向かう。

## 8. レムコ一氏宅

老朽化した純日本建築をリニューアルして旅館にするには、とてつもない不屈の精神と資金が必要と思うが、オランダからきた青年がそれに挑戦するという。一部に手を加えて生活できるようにして、仲間の協力を得てぼつぼつとリニューアルするという。その力の源は一体どこからくるのだろうと思った。無事開業できることをひたすら祈りたい。

## 9. 古民家カフェレストラン「明石屋」で多国籍ディナーと懇親会

フィリピンから平戸に来て、古民家（江戸時代の廻船問屋）にてレストランを経営しているクリスティーナさん（右写真）の心づくしのおいしいお料理をいただきながら、懇親会を行なった。最初にクリスティーナさんにお料理を説明していただき乾杯。しばらくお料理に舌鼓をうち、その後全員自己紹介ショートスピーチと、おおいに盛りあがったディナーとなった。メインディッシュは小関氏の弟君が狩猟で得たイノシシ肉の煮込み料理（右写真）。イノシシ肉特有の臭みが全くなく、軟らかでまことに美味でした。このイノシシは解体の仕方でおいしさが大きく変わってくるという。ご馳走をたくさんいただき、お話をたっぷり交わし、皆さん大満足で平戸海上ホテルへ帰館。



3日目：3月8日（水）

## 1. 平戸城



景観の中の城として日本で最も美しいのはこの城だ、と司馬遼太郎が「街道を行く」で紹介している平戸城にホテルの車で送ってもらい、見学した。この城は松浦家第二十六代鎮信が慶長四年（1599）に築いたが、家康は豊臣家との関係を疑い、鎮信はその疑いを晴らすため築城まもない城を焼いたという。以来、城主は正徳7年（1717）の再築まで約90年間を御館（現在歴史資料館）ですごした。明治四年廃城となり、昭和三十七年、平戸市が復元したもの。天守閣内部は博物館で平戸の歴史を概観する展示がある周囲は360度遮るものがない光景が広がるが、この日は風が強くかつ冷たくて景観を楽しむ余裕なく、早々に退却し、最近できた図書館のロビーで熱いコーヒーで体を温めた。

## 2. 志々伎へ

バスで志々伎へ向かう。志々伎の公民館（志々伎触れあい会館）で、民宿で御世話になる方々と対面し、お世話になることへのお願いと感謝の意を飯田が代表して述べ、ホストを代表して小崎 孝様に歓迎のご挨拶をいただいた。このあと、ボリュームたっぷりのお弁当に「ウチワエビ」の味噌汁がつき、はじめて見るエビの形が興味深く、写真に納め、美味しくいただいた。



対面式



心づくしのお弁当



ウチワエビの味噌汁

## 3. 福田酒造・酒蔵見学

福田酒造は創業元禄元年（1688）で平戸藩御用達の酒造会社。「福鶴」ブランドの日本酒の他、焼酎、甘酒など多種を生産。資料館と工場見学後、試飲を楽しみました。



## 4. 漁師体験

この日は風が強く志々伎港からあると長時間揺れる船に乗る時間が長くなることから、バスで宮の浦港まで行くことになった。港で2班に分かれセーフティージャケットを装着。1班は楠富船長の漁船に、2班は柴山船長の観光船に乗船し、定置網仕掛け場所をめざした。朝、高かった波も収まり船は目的地へ向かい快走。1班組の漁船定置網を引き上ると、網の中に多くの魚を確認。巨大なヒラメをタモでくい上げ、抱えようとするが生きがよくて腕の中で大暴れするので、楠富船長に助けてもらいながらの記念撮影が続いた。皆さん始めての体験に大興奮、大喜びでした。

2班は漁獲風景を短時間観察後、クルージング。とても楽しかったとの感想を聞きました。



柴山船長のクルージング船



楠富船長の作業船は定置網引き上げ中



でつかいヒラメ！



## 5. 民泊

それぞれのお家で心のこもったおいしいお料理をいただき、またお料理法を教わって皆で調理したり、後片付けなども皆でやり、夜が更けるのも忘れ遅くまで話しこむなど、とても楽しく忘れられない一夜となりました。

ホスト	宿泊者	(順不同、敬称略)
小崎 孝家	荒木 一弘、奥田 良行、清水 忠、世古 民雄、中野 義彦、松谷 伸規 飯田 正恒	
宮田 陽子家	安藤京子、野崎喜美子、坪井都子、川辺鈴子	
森 登美子家	青野真樹子、中嶋淳子、道畠日出子、渡邊啓子	
吉村 純子家	岩佐順子、西島美知子、山本知佐子、薬師神通子	
楠富 幸宏家	笹部昌子、太田幸子、鱗星知恵子、岡田洋子、神谷弘子	

## 4日目：3月9日（木）

## 1. 志々伎とお別れ（志々伎公民館にて）

志々伎でお世話になった方々に一夜の思い出話とお世話になったお礼をグループを代表して1名づつが謝辞をのべ、それに対してホストの皆さまから答礼をいただきました。全員で記念撮影した後も別れを惜しむ光景があちこちにみられました。志々伎の皆様には大変なおもてなしをいただき、一生忘れられない思い出ができました。ほんとうにありがとうございました。



## お別れ会の光景

上段：左 吉村家 グループ 右 小崎家グループ

下段：左 森家グループ 中 宮田家グループ 右 楠富家グループ

## 2. 千里が浜

田平へ向かう途中千里が浜で小休止、浜辺に建てられた平戸生まれの台湾の英雄 鄭成功の像と顕彰碑をみて、近松門左衛門の人形淨瑠璃や歌舞伎になった国姓爺合戦の主人公・鄭成功を偲びました。



## 3. 田平天主堂

案内係りの瀬戸博子さん（左下写真）に案内していただいた。

## (1) 教会の歴史



この教会は、明治の初めごろ、九十九島の黒島などから移住して来た元潜伏キリストンがカトリックに復帰して造り上げた。その後、人口が増えると、神父が田平に土地を購入して数家族が移り、次第に移住者が増え、本格的な教会の建築を計画した。信者の積立金、県内各地での募金、篤志家の寄付などを資金とし、信者の献身的な労働奉仕により 1918 年に完成。設計施工は教会建築を得意とする鉄川与助で、レンガ造教会の最高峰と言われる。レンガの繋ぎには、ミナの貝殻を焼いた石灰が使われ、それを作った竈跡が今も残っている。長いキリスト弾圧の苦難の時代をのりこえた信者の人びとが浄財を持ち寄り、奉仕の精神

で作った教会は、まさに心の安らぎをもとめる人びとにふさわしい、たたずまいであった。



(2) 教会は、平戸瀬戸を見下ろす高台にあり、歴史的環境がよく保存されており、国の重要文化財。

(3) 戦時中には天主堂の半分が兵舎として使われ、米軍による機銃掃射を浴び、今も弾痕のあとが残る。

(4) 世界遺産候補として 2007 年、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つとしてユネスコ世界遺産センターに推薦書が提出されたが、イコモスの現地調査で、「禁教期を主体にすべき」との指摘があり、推薦を一旦取り下げ検討した結果、田平には隠れキリストンの歴史がある訳ではなく禁教期との関係性がないことから、世界遺産の候補から除外されることになった。

## 4. 昼食は田平公園で

最後の食事は平戸大橋や平戸市街地の景観が広がる田平公園で。

(右写真は田平公園からみた平戸大橋)

## おわりに（小関 哲 先生）

はるばる大阪からここへ来る価値を信じて足を運び、4日間おつきあいありがとうございました。通常は6泊7日とし、導入部は平戸の歴史を勉強しているという名目で2日間、民泊は3日間、最後に長崎原爆資料館を見てもらい長崎の高校生、大学生たちと語り合ってもらう、自然と歴史と平和構築のためのプログラムを12年続けてきました。

今回とてもうれしかったのは、皆さんニコニコしてくださって少女のような顔で楽しんでくださったことです。皆さん笑顔で帰っていただくと、僕たちはこの仕事を続けて行っていいのだと勇気をいただいたことがあります。ありがとうございました。



以上